Stage Ten
「海峡を渡る歌声」

Stage Ten

風竜の月十二日夕刻、二頭のグリフォンが解放軍の野営地のど真ん中に降り立った。北の空から近づくグリフォンを認めた時に、視力のいいカリナがそのうちの一頭にグランディーナが乗っていることを確認し、着地を誘導してのことだった。

ギルバルドの知らせでトリスタン皇子とアッシュ以下リーダーたちが迎えに出ていたが彼女は主にウォーレンの方を向いてこう言った。

「アラディが帰っているだろう。どこにいる？」

「野営地の南側、魔獣部隊の中です」

「私は彼と話がある。あなたたちとはその後だ」

グリフォンの手綱をカリナに押しつけて、彼女はすぐ案内に立ったギルバルドについていった。

我慢できずに声をかけようとするケビンをアッシュが動作で制した。トリスタン皇子が異議を申し立てない以上、それは皇子の判断に異議を唱えるようなものだ。たとえゼノビア以外の騎士であろうとアッシュには許し難いことだったので、そうと気づいて恰幅のいい騎士は赤面する。

「なぜ止めなかったんですか？」

一方、ケインの声音には不服さがはっきり出ていた。

「訊けば長くなる。彼女一人で戻った理由、助けると言っていたサラディン殿がいらっしゃらない理由、利き腕を吊っている理由、怪我をした理由、裸足でいた理由、曲刀を持っていない理由、そのうちのどれ一つだけを訊いてもわたしたちは納得できないだろうし、全部訊こうとすれば時間がかかってしまう。わたしが引き止めても彼女は承諾しないだろう。ならば、止めなくても同じことさ。

それよりもアッシュ、アラディというのは誰だ？」

「彼女が重用している影たちのまとめ役ですが、解放軍の中でも会ったことのある者はあまりいません」

「そうだろうな」

皇子の表情が一瞬沈んだが、彼は待ちぼうけを喰らわされた者たちにすぐ笑顔を向けた。

「さあ、わたしたちは食事にしよう。さっきからいい匂いを嗅いで腹ぺこなんだ」

「そう言っていただいても、いつも代わり映えのしない献立で申し訳ありませんわ」

「何を言ってるんだい、マチルダ。君ほどの料理人はいないとわたしは日々感銘を受けているんだがね」
「まぁ」
明るい笑い声が起き、皇子を中心に人が移動する。その場に残ったのはアッシュやウォーレン、ケインら、ごく少数だ。しかし彼らも互いに視線を交わして頷きあうとこの件をそれ以上蒸し返したいとは思っていなかった。
解放軍のリーダーのやり方が、騎士であったり旧王国に仕えてきた人びとに合わないのはいまに始まったことではないし、これからも多々起きるだろう。すべてはゼテギネア帝国を打ち倒すまでのことなのだから。

一方、その時にはグランディーナはアラディと天幕の中で話し込んでいる最中だった。
ギルバルドの気遣いで彼は一人で天幕を使い、昨日、解放軍本隊に戻ってきて以来、ほとんど外にも出ずにいたのだ。
二人の話は長時間に及んだ。グランディーナの戻った時間が日の入り間近だったこともあるが、原因がそれだけでないことは誰でも容易に思いついた。
しかし、彼女の邪魔をせぬよう、ギルバルドがカリナやチェンバレンを見張りに立たせておいたので、夜が更けるにつれて皆はいつものように休んでいった。割の合わない仕事を言いつけられたカリナたちも最後はギルバルドが交代を申し出たので休むことができ、グランディーナがようやく天幕の外に顔を出した時には、起きているのは夜営の当番の者とギルバルドだけという有様であった。
「どうしてあなたがこんなところにいるんだ？」
「皆を休ませてしまいましたのでわたしが立っていました」
「ちょうどいい。あなたに相談したいことがあるが大丈夫か？」
「その前にアラディの分も夕食を残してありますが、食べませんか？」
しかし彼が見ていると、天幕の中に頭を引っ込めたグランディーナはすぐに出てきてこう言った。
「アラディは食べるそうだから教えてやってくれ。私は要らない」
「承知しました」
「申し訳ありません、ギルバルドさま」
「気にすることはない。おぬしこそ遅くまでご苦労だったな」

「これがわたしの仕事ですから」
それからアラディは二人に頭を下げると教えられた方に走り去った。
「話とは何でしょう？」
「天幕の中で話そう」
そうして二人はしばらく天幕に籠もっていた。
ギルバルドが出てきた時には、空が白みかけていたほどであった。

翌風竜の月十三日、朝食後、グランディーナとトリスタン皇子も含めた解放軍のリーダーたちの話し合いの場がもたれた。内容は彼女が解放軍本隊を離れていたあいだのお互いの報告が主なところだ。
アッシュから始められたそれは、解放軍本隊に大した動きがなかったことを物語る。グランディーナたちがバルモアに発った直後の風竜の月三日、マラノ市参事会が多額の寄付を申し出てきてくれたので、いままで皆が汲々としていた資金繰りがいきなり潤沢になったというヨハンの報告より大きなものはないほどだ。
さらにマラノを落として解放軍への志願兵が来たり、皆、思う存分休み、最近では訓練が主な日課というのがマチルダも含めたほかの十人の揃った意見であった。

「志願兵の所属は決めたのか？」
「はい、できることを確認した上で僭越ながら、わたしが皆様と相談させていただいた上で決めさせていただきました」
ウォーレンの返答にグランディーナはそれほど興味のなさそうな顔で頷いた。
今度は彼女がバルモア行きの成果について少し詳しく話し始めた。ユリマグアスという不思議な町について、利き腕を吊るようになった理由、両手足の傷を負った経緯、サラディン＝カームの復活と、アルビレオを倒したことなどをだ。
しかしサラディンを助けたり、アルビレオを倒したりという話はまだ信憑性があったが、神殺しの獣、スコルハティの話になるとまさか、という雰囲気が漂ってきた。彼女の強さは誰もが知っているが何かと怪我も多い。ましてや目撃者は全員留守だ。頭ごなしに眉唾だろうと言い出す者こそいなかったが、彼女が敗北し怪我を負わされ、曲刀まで折られたという話をすると、やはりという空気さえ漂った。
勘の良いグランディーナがそれを察していないとはトリスタンには思えなかったが、傍観者という気楽な立場と彼女の真意を測りかねて口を挟むことはしない。

自分の仕事はゼテギネア帝国打倒までだと公言する彼女のことだ。己の力のすべてを味方にも示さぬことも計算のうちなのかもしれなかった。

そんなトリスタンの考えなど知らぬ風で、さらにグランディーナはサラディン、ランスロット、カノープスと二頭のグリフォンが、カストラート海に行ったことをつけ加えて話を締めくくった。

半月も解放軍本隊を留守にしていた割には大した成果ではない、というのが皆の正直な感想のようだが、もちろんそんなことをグランディーナに面と向かって言える者は今の解放軍にはなかなかいない。せめて同行者のランスロットたちが帰ってくればもう少し詳しいこともわかるのだろうが。

「何か訊きたいことはあるか？」

「そなたの腕が動かないのは我々にとって戦力減となるはず、ましてや今回はランスロットたちもおらず、頼みにしていたサラディン殿もいない。それでも予定どおりアラムートの城塞を攻めると言うのか？」

「当然だ」

「無謀だとは思わぬのか？」

「それよりも解放軍がマラノで動きを止めて半月経つ。サラディンたちの帰りを待てば、さらに一ヶ月はマラノから動けまい。たとえ不利な条件であってもこれ以上勢いが切れるようなことはしたくない」

「勢いが大事なことはわしにもわかる。だがこのたびの戦力減を庇うほどの策がそなたにあるのか？断っておくが、勢いだけで勝てるほどアラムートの城塞は甘くないぞ」

「それぐらいあなたに言われるまでもない。だが待つことの益よりも不利益の方が大きい。アラムートの城塞はサラディンたちの戻る前に落とす」

「そなたが考える、待つことの不利益とはどのようなことだ？」

「これ以上、帝国に時間を与えたくない。我々と違い、帝国は待つほど有利になる」

アッシュはしばらくグランディーナを凝視していたが、彼女も負けじと睨み返す。そのあいだ、誰も口を挟むことができずに気まずい空気さえ流れたが、先に動いたのはアッシュの方であった。

「よかろう。それではまた訊くが、そなた一人だけ先行した理由を聞いていなかったように思うが？」

「私はアラムートの城塞に行くのは初めてだ。アラディの報告を聞くために先に戻ったが、先行してアラムート海峡に行ってもらいたい用事ができた」

「誰に何のために先行させるつもりなのだ？」
「ギルバルドとユーリアだ。魔獣部隊を西大陸に渡す準備だと思えばいい。ギルバルドが留守のあいだは魔獣部隊をロギンスに任せる。
ほかに訊くことがなければ今後の予定を話す。私たちは明日、マラノを発つ。魔獣部隊はデネブたちが戻るまで待機し、ともに発て。彼女たちは明明後日（しあさって）には着くだろう。ただし今回、いまも言ったように魔獣部隊は別行動を取らせる。あなたたちはそのことを肝に銘じておけ」
「承知した」
アッシュとギルバルドは頷いたが、他の者は不安そうな表情を隠さない。
共闘しているとは言えないが、解放軍にあって魔獣部隊の存在は大きい。人とは比べものにならない体力は、様々な局面で解放軍を支えてきた。荒鷲の要塞とも呼ばれるアラムートの城塞攻めを前に、アッシュの指摘した不利な状況の改善は望めない状態である。この上、魔獣部隊の援護もないとあれば、不安に思うのも無理からぬところだった。
「アラムートの城塞を守るのはジェミニ兄弟、半巨人の噂もある巨漢だ。詳しい状況はもっと近くなってから話そう」
「お待ちください」
「まだ何かあるのか？」
そう言ったグランディーナは早々と立ち上がっていたが、マチルダが負けじとその腕をつかんだ。
「昨日、お帰りになってからどなたにも傷の手当てをさせていないではありませんか。アイーシャさんと別れてから何日経っているんですか？」
マチルダばかりか周囲にとっても意外だったのは、反対するか、少なくともその手を振りほどくだろうと思っていたグランディーナがそうしなかったことだ。
「そう言えば忘れていた。頼む」
「立ったままではやりにくいので腰を下ろしていただけませんか？」
これにも彼女はあっさりと従った。ふだんのグランディーナを知る者が見れば、そんなに酷い怪我なのかと思うのも無理はない。実際、試しに右腕の包帯を外したマチルダは唖然とすると同時に予想されてしかるべきことを予想しなかった自分にも腹が立ったほどだ。
もちろんリーダーたちは誰も立ち去っていなかったし、トリスタン皇子も残っていた。その誰もがグランディーナの態度からはとうてい予想できない重傷ぶり

にしばし話をするのも忘れて息を呑む。肉が抉られ、一部はまだ骨さえのぞいていたからだ。
「この傷は、全部同時に負われたものだと仰いましたね？」
「そうだ」
「ほかの三ヶ所も同じような状態なんですか？」
「アイーシャに診てもらったのは一昨日だが、その時とは大して違わないからそれほど治っていないと思うが、片手では包帯を替えられないからよく知らない。驚くのはあなた方の勝手だが手当は早く済ませてもらえないか」
「すみません。これほど酷いとは思っていなくて。いま、モームさんが治療道具を取りに行ってくださってますわ」
そう言っているあいだにモームが急いで戻ってくる。
寄付金のおかげでいままで揃えられなかった装備にもかなり余裕ができていた。治療道具一式を収めた鞄もそのひとつで、いまはたいして役に立たないが、戦闘が始まればなくてはならない物になるはずであった。
もっとも、グランディーナの傷は治療道具があっても手こずる重傷で、マチルダもモームも手当が終わるころには額に汗を浮かべていた。
そんなものを見せられてしまうと先ほどの話もにわかに信憑性を帯びてくるから困ったものだ。
当人だけがいつもと変わらぬ顔で、治療されるところをまるで他人事のように見ている。
「グランディーナ、裸足では傷にもよくありません。靴を履いてください」
そう言われて、彼女は初めて自身がユリマグアスからずっと裸足で過ごしてきたことを思い出したように足を見た。
他の者はいつ、誰が言い出すかと思っていたが、今回の貧乏くじはマチルダが引いたようだ。
「引っかけ靴は足下が落ち着かないから嫌いだ。革靴が履けるようになるまで裸足のままでいい。それよりも剣が欲しい。ヨハン、片手用の剣の備えがあるだろう？」
「大した数がなかったと思いますが、よろしいのですか？」
「何でもいい」
「剣よりもあなたに必要なのは靴ですよ。私の履いているような柔らかい靴だってあるじゃないですか」
そう言われてグランディーナはマチルダの足下に目をやった。

解放軍で履かれている靴はおおよそ三種類ある。騎士たちや魔獣部隊が革靴で激しい動きを支えている。動きは多いが僧侶や司祭、それに魔法使いたちのほとんどが柔らかい生地の布靴だ。そして女戦士たちと少数派の魔法使いが引っかけ靴を履いているが、足下が落ち着かないと言うよりも足を締めつけると言った方が正しいはずである。

案の定、解放軍の結成時からずっと頑丈そうでくたびれた革靴を履いていたグランディーナは、マチルダの提案にはいい顔をしなかった。

「このままでいい」

「そんなわがままを言わないでください。傷口を庇うためにも靴は必要ですわ」

「革靴ならばともかく布靴は濡れたら使い物にならない。履いていてもいなくても違いはないだろう」

「そんな、いくらなんでも乱暴ですわ」

「どうせ裸足には慣れている」

マチルダの説得も空しく、グランディーナはとうとうじれったそうに立ち上がり、話を打ち切った。その様子はとても利き腕が動かず、解放軍のなかの誰よりも重傷を負った者とは思われない。

「ギルバルド、魔獣部隊で待ってろ。すぐに行く」

「承知しました」

ヨハンも慌てて立ち、グランディーナを補給部隊の方に案内していった。

残る者もばらばらに立ち上がりかけたところ、マチルダが誰にともなく、怨みがましそうにつぶやいた。

「皆さんももう少し協力してくださってもよろしいんじゃありませんか？」

モームがなだめようとするが、こうなってしまうと「解放軍一お嫁さんに欲しい人」は頑固である。それにつき合いの長いランスロットやアレックたちの同席もないから、余計に説得しづらい。

「おもしろ半分に見ているだけなんて人が悪いにもほどがありますわ」

「すまなかった、マチルダ。だが君もいるんだ、靴のことにこだわらなくても、それほど大事に至ることはないだろう？」

トリスタン皇子のとりなしに、マチルダもいつまでも腹を立てているわけにもいかず、それでもまだ不満そうな顔をしている。

「ですが殿下、アラムートの城塞までは山地に入るというではありませんか。そのようなところでも裸足だなんて」

「それでいいと言ったのは彼女だ。だが、それで傷を悪化させるようならば治療部隊の長としてまた彼女と話せばいい」
「彼女が私の進言を聞き入れてくれましょうか？」
「そのためのリーダーじゃないか」
マチルダは少し考えて、ここは未来の主人の顔を立てるべきと思ったのか同意した。もちろんその前に、非協力的だったリーダーたちを睨みつけることも彼女は忘れなかった。

補給部隊で武器を選んだグランディーナは、ヨハンと別れて魔獣部隊に向かった。ギルバルドとユーリアは二頭のワイバーンに鞍をつけ、談笑しながら旅支度を調えているところだ。
「待たせたな」
「いいえ。お待ちしているあいだにロギンスとユーリアに話す時間がありましたよ」
「あなたもおもしろいことを考えつくのね。あなたでもなければ考えつかないようなことかしら？」
「あいにくと今回はおもしろがっているような余裕がない。おもしろいと言うより奇策だな」
「ですが、ユーリアの言うとおり、我々がこのような策を立てようとは、ジェミニ兄弟も思いつきますまい。アッシュ殿の言われた不利も引っ繰り返すことができるかもしれませんぞ」
「それもあなたたちの頑張り次第だ。私たちはあなたたちの策が成功したものとして動く」
「承知しております」
「くれぐれも気をつけて行け」
「あなた方もご武運をお祈りしておりますぞ」
「そんなことはどうでもいい」
クロヌスに乗りかけたギルバルドは、グランディーナの即答に足を踏み外しかけた。
「私たちのことなど気にするな。あなたたちが失敗すればアラムートの城塞を落とすのは至難の業だ。それ以外のことを考えるな」
「わかりました」
プルートーンに乗ったユーリアが、後からやってきたアラディが乗るのを手伝う。二頭のワイバーンは順に飛び立っていき、その姿はやがて北西の空に見えなくなった。
グランディーナはそれをいつまでも見送ってなどおらず、ワイバーンが発つとすぐに野営地の中央の方に戻っていったのだった。

風竜の月十四日、魔獣部隊を残して解放軍は親しんだマラノの都に別れを告げた。

アラムートの城塞までは、街道をたどって六日の距離である。街道は途中でバルハラ方面に分かれていくが、その道は二四年前の戦争のために年中降雪があり、気候も一年を通して寒いのだった。

一方、アラムートの城塞に至る街道は別れ道からじきにセムナーン山中に入る。別れ道がほぼ真ん中にあるので、三日ほど山道を歩かなければならない。

街道はそれほど標高が高くないが、緩く長く続く登り坂は予想以上に体力を奪う。その後に控える荒鷲の要塞を考えると、あまり無茶もできないところだった。

だが、セムナーン山地に入って早々に帝国軍が襲ってきた。その規模は大きく、解放軍は苦戦させられた。それでもいつも偵察に立つホークマンたちが今回は魔獣部隊とともに後発しているからと、グランディーナの指示で早めに偵察を出していたものの、まさかこんなところで、という気の緩みが皆にあったことも苦戦した一因かもしれない。

さらに解放軍を驚かせたのは、帝国軍がマラノを攻撃するつもりでいたという事実だ。万が一にもマラノを落とされれば、いままでの戦いも無駄になる。多くの者は改めてグランディーナの主張に頷きあった。

日頃は慎重であろうとするリーダーたちも、攻撃を仕掛けているのは自分たちの方なのだという事実を思い出した。

この戦いは解放軍が起こしたものであった。それなのに彼らが後手に回ってしまうわけにはいかないのだ。

しかし解放軍も大所帯になり、容易なことでは引き下がらなくなっている。帝国軍の攻撃もその歩みを止めることはできず、風竜の月二〇日夕刻にはラリベルタードを見下ろす街道に野営地を構えたのだった。

グランディーナはいつにも増して夜営を厳重にするよう皆に指示したが、昼間のこともあったので、夜営は普段の倍の人数を立てられることに反対する者もいなかった。

幸い帝国軍の奇襲はなく、ラリベルタードを巡る戦いが始まったのは翌二一日のことだ。

町の門は当初固く閉じられ、解放軍も攻めあぐねた。しかし、じきに東門が内部から開けられると、なだれ込んだ解放軍の前に帝国軍は押されてしまい、やがて守備隊は白旗を掲げた。

アッシュたちが後で聞いたところによると、ラリベルタードに影が侵入しており、その者が東門を開けたのだという話だった。

解放軍はいつものようにラリベルタードに留まらず、街道を南下した。

セムナーン山地の西側には南北に細長いヤースージ平野が広がっている。ラリベルタードから下る街道はトルヒーヨ、キリグアバリオスを経てミナチトランまで続く。ミナチトランで船に乗り換え、海峡の小要塞テグシガルパを経た対岸に、ゼテギネアの西大陸唯一の玄関口として、アラムートの城塞が聳え立っていたが、街道から外れたヤースージ平野の端にも町はいくつかあった。

しかし、ゼテギネア大陸を東から西に渡るにはどうしてもアラムート海峡を渡らなければならず、その際はミナチトランとアラムートの城塞は決して通らないわけにもいかない。それは、アラムート海峡辺りの海域は流れが速い上に、西側はダルムード砂漠であり、アラムートの城塞以外に港がないこと、さらに海峡の西側は崖が続き、そもそも都市ができるような場所もないこと、そのために否が応でもアラムートの城塞の重要性は増し、そこを落とさねば、西には至れないと言われてきたのであった。

解放軍は風竜の月二二日にトルヒーヨを落とした。ここでも影の活躍があって早々に北門は開けられたものの、守備隊の数がラリベルタードの倍近くいたため、思わぬ苦戦を強いられた上での勝利だった。

「今日のことは肝に銘じておけ。しょせんは統率の取れていない烏合の衆だが、数の多さは強みになる。自分たちが有利だと思えばいくらでも図に乗ってくるだろう。それにセムナーン山中で我々を襲ってきたのもアラムートの城塞の守備隊の一部だと考えられる。最初からかき集めたのか増強したのか知らないが、かなりの兵力がいるだろう」

「今回は帝国が数で攻めてくると考えるのか？」

「いままでやってこなかっただけで帝国にはできたことだ。ラリベルタードを落としたのは昨日だ。その対策にトルヒーヨの守備隊を増強したと考えるのが妥当な線だろう」

「この先も帝国が同じ策を採ると？」

「可能性は無視できない。いくら我々が増えたとはいえ、数は帝国の方が圧倒的に多い。単純な策だが効果はある」

「ですが、投降してきた帝国兵をその場で放すようでは帝国軍の数は減らないのではありませんか？」
「彼らを捕らえておくような場所もなければ、そのために裂ける人員もない。それに一度戦意を喪失した兵が前線に戻されても役には立つまいし、そのまま逃げ出す者もいよう。まさかあなたも、彼らを皆殺しにしろとは言うまいな？」
「とんでもありません」
慌てて手を振って否定したチェスターは、まるで口調を変えずにそう言い放った解放軍のリーダーに、捕虜の殺戮を経験したことがあるのを見てとった。必要とあれば、自らの判断で、己の責任として彼女はこの中の誰よりも躊躇(ためら)うことなくそうするだろう。その立つところのなんと異なることか。
「それにしても、烏合の衆とは言いすぎではありませんか？」
「統率も取れていなければ命令も行き渡っていない。自分たちが有利なうちは強気だが、不利とわかれば媚びることもへつらわない。烏合の衆という以外に何と言いようがある？」
「それはそうでしょうが」
グランディーナが立ち上がったので、リーダーたちは話が終わったものと理解した。だがそうはいっても、彼女の言葉を全面的に受け入れているわけでもない。半信半疑の気持ちが強い者の方が多かった。しかしそれも進んでいけばわかることだ。

彼女の忠告はキリグアバリオスを攻める時になって事実と知れた。守備隊はトルヒーヨよりもさらに多く、二度も続けて正門を内側から開けられ、それが原因で敗れたことを鑑みてか、北門の警備は特に厳重になっていた。
そこで一計を案じたグランディーナは、キリグアバリオスの手前に野営地を設置した。いつもより松明を多めに焚かせて存在を主張する一方、元気な者、解放軍の約半数を率いて、西南の門から攻めた。こちらは北門ほど警備が厳重ではなく、影の手引きで内部から開けられ、じきに落とせた。そのままキリグアバリオスの町中に攻め込むと、帝国軍を各個撃破して、明け方には片がついたのだった。
総数ではすでにキリグアバリオスの全守備隊に劣る解放軍だったが、個別に対峙したことで戦力差を小さなものにしたのである。
怪我人も徐々に増えていたが、解放軍の進撃は止ま

らず、金竜の月に入って街道の終点、ミナチトランにたどり着いた。

しかし、ミナチトランの守りはさらに堅かった。翌金竜の月二日、ミナチトランに攻め込んだ解放軍は一時撤退せざるを得なかったほどだ。

翌日、再度ミナチトランを攻めた解放軍は、守備隊の多さに苦戦させられたものの、今度はこれを落とした。西側に港を構えるミナチトランの防御は、他の都市に比べると脆いところがあったのである。

だが、解放軍の払った犠牲も小さいものではなかった。死者こそ出なかったものの、大勢の負傷者が出てしまい、治療部隊がてんてこまいの忙しさに見舞われたことはもとより、何人かの者はしばらく戦闘に参加できないことがマチルダからグランディーナに報告されたのだ。

「負傷者はロシュフォル教会で静養させるのか？」

「そうさせていただきました。ですが、そうしなくて済む方々もあまり無茶はさせたくないのですが」

ところが、マチルダから渡された負傷者の名簿に目を通したグランディーナはこともなげにこう答えた。

「まだテグシガルパとアラムートが残っている。動ける者には参加してもらう」

「そんな無理をさせては治る傷も治らなくなります。皆さんがあなたのようにはいかないんですよ」

「数が少なくなればほかの者が怪我をする可能性が高まる。多少無理をさせても、動けるのならば戦闘には参加させる」

「半数以上が怪我人なのにそんな無茶はさせられません！」

マチルダの語尾が悲鳴に近かったのはグランディーナがいきなり怪我人の名簿を破り捨てたせいもあったろう。利き腕が動かないために口と手を使ったが、名簿が役立たずになるには十分だった。

「それよりもあなたに頼みたい。右腕が邪魔だ。身体に固定させられるか？」

「なんですって?!」

「この状態で私だけ安全なところにいるわけにもいくまい。大した戦力にもならないが、右腕を動かないようにしておけば少しはましだ」

マチルダは開いた口がふさがらない思いをさせられると同時に、自分ではどう足掻いてもグランディーナを説得できないことを知った。いいや、自分ばかりでなく、ランスロットやアイーシャにも彼女を止めることはできないだろう。

彼女の怪我は完治にはほど遠い。ラリベルタードの攻防戦からトルヒーヨ、キリグアバリオス、ミナチトランと前線に立っていなかったが、確かに解放軍のいまの状態は、グランディーナ一人を安全な場所に置くことのできないところまで追い詰められてもいるのだった。

「その前に傷を診てもいいでしょうか？」

「頼む」

「痛むのですか？」

「おかしなことを訊くな。私も人間だ、怪我もすれば傷も痛む」

「すみません。ですが、それならば、少しは休んだ方がいいんじゃありませんか？」

「その話はもう済んでいると思ったがな」

マチルダが恐縮すると、グランディーナは「だが」と言う。

「さすがに明日は皆を休ませる。テグシガルパ攻めは海上戦が中心になるだろうし、皆の疲労も溜まっている。このまま戦ってもこちらが不利なだけだ」

「それを先に言ってください」

「アッシュたちにはもう伝えた。あなたには忙しそうだったから言いそびれた」

彼女があんまり白々しい言い方をしたもので、マチルダは一瞬手が止まったが、もう怒る気にはなれなかった。

そう言われてみれば、野営地を設置する皆の表情には昨日までの悲壮さがない。明日が休みとわかって少し気楽になったのだろう。

これ以上怪我の話をしていても不毛だと思われたので、マチルダは話題を変えることにした。

「ギルバルドさまたちはいま、どの辺りにいるのでしょうね？」

「さぁ。いまの居場所など興味はない。アラムートの城塞で会えれば十分だ」

「そういうものですか？」

「そうでなければ、彼らに別行動させている意味がない」

「早くお会いできればよいのですが」

グランディーナは無言でマチルダの手元を眺めている。彼女には応急手当の心得ぐらいあるようだが、さすがに利き腕が動かないいまは何もできない。サラディンたちの帰還を待たずにアラムートの城塞を攻めるのは、その焦りもあってのことだろうか。

「デネブさんやアイーシャさんはギルバルドさまた

ちと一緒でしょうか？」
「さぁ。ギルバルドにもロギンスにも特に指示はしていない。デネブにしてもアイーシャにしても、行きたい方に行くだろう」
デネブが留守なので四人のパンプキンヘッドたちは完全に役立たずである。女戦士たちのおもちゃにはなってもこと戦闘となるとデネブの命令しか聞かないのだ。もっとも、たとえ魔女がいたとしてもパンプキンヘッドの攻撃など誰も当てにしていなかったが。
しかし、翌金竜の月四日になってもデネブたちは追い着いてこず、マチルダは相変わらず怪我人たちの面倒を診ながら、彼女たちの行方をも案じた。
ところが昼過ぎになって帝国軍がミナチトランを奪還すべく攻めてきたので、夕方近くまで解放軍はその対応に追われることになった。
ミナチトランを押さえるということは、テグシガルパ、アラムートにすぐ攻め込めるということでもある。アラムート海峡に面した都市のうち、他に港を持つところはないからだ。それだけにいくらアラムートの城塞が難攻不落の要塞とは言っても、テグシガルパ、ミナチトランを失っては防御力も劣るのだ。
結局、帝国軍はミナチトランを取り戻すことはできなかった。しかし、一日休養するはずだった解放軍にとっても、この攻撃は痛いものとなったのである。

「船に乗れ。テグシガルパに行くぞ」
「また帝国軍が攻めてくるのではないか。昨日の疲れも取れていない。ここは待つべきではないか」
「我々が守りにまわったところで利することは何もない。帝国がそのうちにミナチトランを諦めると思っているのか？　我々がミナチトランに籠もっていれば、帝国はますます図に乗るだけだ。船に乗れ。何度も同じことを言わせるな。休むなど、アラムートの城塞を落とせばいくらでもできる」
「わかった。だがそなた、まさか戦闘に立つつもりではあるまいな？」
「この状況だ。私だけ安全なところにいられない。左腕だけでも多少の戦力にはなれるつもりだが？」
グランディーナの即答にアッシュは絶句したが、皆がどうなることかと気を回す前に頷いた。
「そなたに覚悟があるのなら、わしがとやかく言うことはない。
さぁ、戦える者は船に乗れ。テグシガルパを獲りにいこうぞ」

アッシュのかけ声に応じる者は多かった。しかしそれ以上に、利き腕も動かず、手負いの姿で皆の先頭に立とうというグランディーナに応じた者たちもかなりの数がいたのである。

こうして解放軍は三艘の船に分乗してテグシガルパに向かった。ミナチトランからテグシガルパまでは船で二時間ほどの距離だ。

テグシガルパは島全体が小規模な要塞と化し、そうでなくても強固なアラムートの城塞を守る文字どおり最後の砦である。難攻不落の要塞としてその名を轟かしてきたのはアラムートの城塞のみなのだが、二つの要塞はほぼ同時期に建造された物とも言われているのであった。

ところが、ミナチトランとテグシガルパの真ん中辺りで解放軍は帝国軍と遭遇、そのまま海上戦となってしまった。陸と違い、船上での戦闘は足下がおぼつかない。こんな時は魔法使いたちの呪文が頼りで、騎士や剣士たちの役割は彼らを守ることがほとんどだった。

帝国軍の繰り出した数の前に解放軍も敵を後退させる決定的な力を出すことができず、かといって帝国軍も解放軍をそれ以上後退させられなかった。両軍はそれぞれミナチトランとテグシガルパに後退することになった。

一計を案じたグランディーナは、翌金竜の月六日、夜明け前にミナチトランを発った。

船は夜が明けて間もなくテグシガルパに到着、帝国軍はそこで解放軍を迎え撃たねばならず、唯一の進入路である港を巡って両軍は激突した。

戦いは呪文の撃ち合いから始まった。

さらにその中を弓矢が放たれる。

前線に立ったグランディーナは矢継ぎ早に皆に指示を飛ばし、数で劣るところを補助した。それは十分すぎるほど的確なものだったが、この期に及んでもまだ大軍を繰り出せるゼテギネア帝国の底力の前には足りなかった。

一人、また一人と解放軍の戦士が倒れていく。

徐々に治療部隊の手が追い着かなくなり、皆が再度の撤退を覚悟しだした時、戦場に場違いとしか思われない陽気なかけ声が響き渡った。

「ほーら、カボちゃんたち、いくわよ〜。ドラッグイーター！」

その時ばかりは解放軍も帝国軍も手を止めて、空から大きくなりながら落ちてくる、四つの南瓜を見つめずにいられなかった。

いつもならばまるで当てにできないパンプキンヘッドの命中精度も、標的がまったく動かぬ要塞となれば話は別である。四つの南瓜は落ちる時間と場所をずらしながら次々に落下して、破城槌でもこううまくはいくまいと思えるほど的確に、堅固な、築城以来、一度も破壊されずにきたというテグシガルパの城壁を見事に打ち壊していった。

「テグシガルパを占領するぞ！　続け！」

落ちた南瓜がどこへ消えたのかと皆が思う間もなく、グランディーナは剣を掲げ、テグシガルパに攻め込む。残り少なくなった狂戦士や騎士たちがこれに続いた。

すかさずポリーシャの指揮の下、槍騎士、女戦士たちが援護射撃を発し、ウォーレンたち魔法使いもここぞと最後の魔力を振り絞る。

援軍はデネブばかりではない。アイーシャに、アヴァロン島で大怪我を負って皆に遅れたユーゴス＝タンセとスティング＝モートン、それにバルモアで解放軍に加わったキリクス＝プレスベリら十人もである。

わずか十四人、しかし多くの者が倒れた現在、十四人の援軍は萎えかけた皆の気持ちを奮い立たせるには十分だった。

逆に帝国軍は、解放軍の戦力では壊されるはずのなかったテグシガルパの城壁が部分的にも破壊されたこと、続いて解放軍が攻め込んできたことにすっかり戦意を挫かれてしまった。

援軍の中にはホークマンのオイアクス＝ティムが加わっており、グランディーナはすかさず解放軍の旗を渡した。青い無地の旗が翻るのはおよそ二ヶ月ぶり、ディアスポラのソミュールで旧ホーライ王国の残党が加わって以来のことだ。

テグシガルパは苦戦の末に解放軍の手に落ちた。

だが、そのために払われた犠牲も小さなものではなかったのである。

「グランディーナ」

マチルダはそう言ったきり、絶句した。一昨日のように名簿を作ってくる気力も必要もなかった。解放軍のリーダーたるものがそのことを理解していないはずもない。

当のグランディーナさえ、無傷ではいない。戦場に出れば当然狙われる。その分、他の者への攻撃が緩まるとはいえ、いまの彼女にはそれをすべて捌ききれるほどの力は発揮できない。

「あなたたちに話がある。皆のところへ行こう」

「アッシュさまたちをこちらにお呼びしますか？」
「怪我をしているのはお互い様だ。私が行った方が早いだろう」
動かぬ右腕を身体に縛りつけた包帯はいまは外されている。だが、逆に包帯の箇所は増えたぐらいで、本隊に合流して以来、グランディーナにつききりだったアイーシャが案ずるような眼差しを二人に向けたが、彼女は意にも介さなかった。
「デネブさんたちがいらっしゃることを知っていたんですね？」
「まさか。あれは計算外だ」
「ですが、ギルバルドさまたちは追い着いてはこないのでしょう？」
「その話をアッシュたちとするつもりだ」
いまの解放軍の状態にあっては野営地と言うよりも野戦病院と言った方がいいような有様だ。治療部隊だけでは足りず、動ける者はほぼ全員が手伝わなければならなかった。そういう者たちでさえ、援軍の十四人以外は無傷ではなく、比較的軽傷というだけに過ぎないのである。
だがそうした怪我人たちのあいだを、グランディーナは眉一つ動かすことなく足早に抜けていった。そこかしこからうめき声が聞こえてくるというのに、彼女の表情はいつもと変わることがない。
すでに重傷者はミナチトランのロシュフォル教会に預けてきたが、テグシガルパでもその必要があった。除隊を余儀なくされそうな重傷者はいても、昨日までは死者がいないことを奇跡に違いないとマチルダは考えていたが、テグシガルパではそんなことはもう言えなさそうだ。
「ご苦労だった。明日のことを話しておこう」
アッシュを始めとするリーダーたちは比較的軽傷で済んでいる。しかし皆の表情には傷の程度以上の疲労がにじんでいるのがマチルダにはわかった。
「今回、魔獣部隊に別行動を取らせていることはあなたたちにも言ったとおりだ。アラムートの城塞攻めは彼らが鍵を握っている。私はこれからユーリア＝ウォルフの合図を待つ。魔獣部隊が西から、我々が東からアラムートの城塞を攻めるためだ。あなたたちにも話したとおり、アラムートの城塞を治めるのはジェミニ兄弟、彼らをおびき出すのが私たちの役割だ。魔獣部隊がそのあいだにアラムートの城塞を落とす」
「いまの我らに囮が務まると考えているのか？」
「あなたたちに囮になれとは言っていない。そのた

めに私が前線にいる」
「無謀すぎる。いくらそなたとはいえ、手負いの状態でその二人から逃げ切れるのか。それにいくら囮がいても城塞を攻められたぐらいでジェミニ兄弟が出てくるとは思えん。アラムートの城塞に残っているのはジェミニ兄弟だけのはずがあるまい？」
「出てこさせる。そのために私という餌を彼らの鼻先にぶら下げてやるのだし、魔獣部隊は我々より遅れてアラムートの城塞に着く。敵は彼らの存在には気づいていないはずだ。西のダルムード砂漠はいまだ帝国の勢力圏、そちらから攻められようとは夢にも思っていまい」
「そう言えば、グリフォンやワイバーンはともかく、ドラゴンをどうやってあちら側に渡したのだ？」
「そんな話はアラムートの城塞を落としてからギルバルドに訊け。もちろんこちらもただは攻めない。あなたたちも疲れているだろうが最後の攻撃だ。ジェミニ兄弟にも我々が最後の戦力だと思わせなければ」
「魔獣部隊がジェミニ兄弟と戦うことはないのか？」
「それもいいだろう。その時も戦力の分断が望ましい。この期に及んで帝国に余裕を持たせるような攻撃はしない。幸い元気な者も来た。彼らにも頑張ってもらうとしよう」
「それで？　ユーリアからの合図は来たのか？」
「まだだ。私の予想では今夜来るはずだが」
「この状況だ。魔獣部隊を足止めするわけにはいかぬのか？」
「飛行魔獣が一頭もいない状態でどうやって対岸に渡るつもりだ？　予定はずらせない。ユーリアからの合図があり次第、アラムートの城塞を攻める」
「ですが怪我していらっしゃる方が多すぎます。いまのお話では、魔獣部隊の到着まで待たされるのではありませんか？」
「東西から同時に攻めたのでは意味がない。魔獣部隊の動きはぎりぎりまで敵に知られたくないし、我々より遅いぐらいがいい」
「ユーリアからの合図がなければ、明日は休めるということだな？」
「帝国が攻めてこなければな。これだけの怪我人だ。休むという名目は立つだろう」
「だが、我々だけで帝国軍を引きつけ得ようか？」
「引きつける。囮が囮と思われては意味がない。案ずるな、私は引っ込むつもりはない」

「ならば、わたしも手伝おう」
「ト、トリスタン皇子！」
「わたしだけいままでの戦いに参加していない。おかげで無傷で済んでいるが、このような事態になっているのに、わたしだけ何もしないというわけにはいかないだろう？」
「とんでもありません！」
アッシュは血相を変えて立ち上がったが、次の瞬間には怒りの矛先はトリスタンからグランディーナに変えられていた。
「そうだな。あなたにも働いてもらうとしよう」
「何を言うかっ！　護衛さえろくにいない状況で殿下に敵将の囮になれだと?!　殿下にもしものことがあったら、どう申し開きをするつもりだ?!」
「申し開きなどするつもりはない。囮は一人でも多い方がいいし、トリスタンは私に次いで適任だ。本人がやると言い出したものを、なぜ私が止める必要がある？」
「殿下にそのような危険な真似はさせられぬと言っているのだ！」
アッシュは抜刀こそしなかったが、いまにもそうしかねない勢いだ。
「待ってくれ、アッシュ。ここで解放軍が敗れれば、わたし一人が生き延びたところで意味はない。わたしとて剣の心得ぐらいはある。わたしの身をそのように案じてくれるおまえの気持ちはありがたいと思うが、やらせてはくれまいか？」
アッシュは改めてトリスタンに向き直ったが、苦悶に満ちた表情からはいまにも激しい歯ぎしりの音が聞こえてさえきそうだった。
それを見たトリスタンは胸が傷んだ。アッシュがこれほどまでに強く反対するのは、父グラン王を失った思いもあることに気づいたからだ。
二四年もの長きにわたって囚われた身でありながら、元騎士団長は安穏などこれっぽっちも望んではいない。かつての主君一家を誰一人守ることができなかったという負い目はいまも彼を苛んでいる。トリスタンは彼のただ一人の主君でありながら、いまだ主君になりきれていなかった。だが彼には、アッシュの望むものは決して与えられない。それはただ、いまは亡き神帝グランだけが与えられるものなのだ。
「やるのか、やらないのか？」
グランディーナの冷静な声音がトリスタンの考えの中に割り込んでくる。彼女にもアッシュの気持ちはわ

かるまい。そのことで悩むトリスタンの思いも。グラン王の後継者である自分以外には誰にもわからぬことなのだろう。

「囮は多い方がいいと言ったのは君だ。それに、魔獣部隊が着くまでのあいだなのだろう？」

「それがどれぐらいのことか、私は保証しないぞ。だが、あなたがそう言うのならば決まりだな」

「待たれよ」

「アッシュ、あなたがトリスタンの護衛につきたいと言うのなら、私はそれを止めるつもりはない。好きにするがいい」

彼は膝を落とし、うなだれた。

「グランディーナ、私も、殿下をお守りしてもよろしいでしょうか？」

ポリーシャが立つと解放軍のリーダーは頷いた。

「総攻撃とは言っても大した数も残っていない。アラムートの城塞を攻める時には私が直接、指示をする。あなたたちが誰を守ろうと好きにするがいい。

話はそれだけだ。いまのうちにせいぜい休んでおけ。今夜中に合図があれば、夜明け前に発つ」

「まさかそなた、一晩中合図を待つつもりか？」

「誰かに肩代わりさせるわけにもいくまい」

アッシュ以下、その場の誰もが絶句したが、グランディーナは立ち上がり、皆を見渡した。その表情はいつもと変わることなく冷静そのものだ。

「あなたたちも辛いだろうが追い詰められているのは帝国も同じだ。そのことを忘れるな」

「わかっていてもつい気弱になってしまいますな」

そう答えたケビンも頭に包帯を巻いている。無論、隣のチェスターも無傷ではない。

「弱気になった方が負けだ。兵が気弱になるのはしょうがないが、あなたたちまでそれでは困る」

「そなたに限って、こんな時に精神論を説くとは思わなかったぞ」

アッシュの揶揄は、言っている彼の方が苦しそうに見えた。グランディーナがそのことに気づいていないはずもなく、彼女は鼻先で笑うとその場を立ち去ってしまった。

「この状況でよくもああ強気でいられるものだ」

呆れたように言ったのはケビンだったが、その場の全員が同感である。

「だが、彼女の言うとおり、追い詰められているのはむしろ、アラムートの城塞以外を失った帝国の方だろう？」

「だからこそ、用心せねばならぬのです、殿下。あれだけの大軍を繰り出してきた帝国ですが、余力はまだ残しておりましょう。それだけに手負いの我らが魔獣部隊が来るまでどれだけ持ちこたえられるものか。窮鼠猫を噛むと申しますが、追い詰められたのは鼠でも猫でもない、獅子なのです」

「わかっている、アッシュ」

そこへモームが珍しく血相を変えてマチルダを呼びに来た。彼女はマチルダに耳打ちしただけだったが、何があったのかは誰にでも予想できた。

重傷を負ってロシュフォル教会に預けられていた誰かが、手当の甲斐なく死んだのだ。

マチルダは皆の顔を見渡したが、ウォーレンが頷いたので説明の必要はないものと考えたらしく、モームと立った。だが、すぐに戻ってきて一言だけ告げた。

「亡くなられたのはスタンレーさんです」

「スタンレーが？」

「はい。私たちの力が及ばず、申し訳ありません」

「あなたが謝られることではあるまい」

応じたチェスターにマチルダは深々と頭を下げ、今度は振り返らずに走っていった。

「スタンレー＝デュランのことか？」

とケビン。

「スタンレーはほかにおらぬ。まだ若くて腕も未熟だった。それなのにわたしが解放軍に誘ったのだ。そのわたしがどうしてスタンレーを救えなかったとマチルダ殿を責められる？」

そう言ったきり、チェスター＝モローは絶句し、他の者も声をかけることができなかった。

だが、それが今回の戦いの中での最初で最後の死者では終わるまい。そのことだけは誰もが感じていた。

その日の真夜中にアイアンサイド＝テュレンヌの死がリーダーたちに報告された時、グランディーナは港の外れにいるところを発見された。彼女は探しに来たアイーシャに頷いてつけ加えた。

「わざわざすまない。皆はもう休んだのだろう、あなたも休め」

「治療部隊の方たちはまだ皆さん、ロシュフォル教会にいらっしゃるわ。私だけ休むわけにはいかないでしょう？」

「馬鹿な。マチルダは何をしているんだ」

グランディーナが立ち上がりかけたところをアイーシャは慌てて引き止める。

「待って、グランディーナ。マチルダさまが皆さんに仰ったの。明日はアラムートの城塞を攻めるけれど、自分たちの出番はもうないだろうって。だから、今日のうちに全力を尽くしましょうって」
「あなたたちはテグシガルパに残るつもりか？」
「だって、こんなに怪我人がいるのに教会の方々に任せきりというわけにはいかないわ。何人かはあなたたちと一緒に行くけれどほとんどの方は残るはずよ」
「明日はしょうがないか」
グランディーナが腰を落としたのでアイーシャは内心、胸をなで下ろした。
「あなたこそ休まないの？」
「ユーリアからの合図を待ってる。ほかの誰かに頼めることでもないからな」
「そう」
グランディーナにも無理をするな、とは言えなかった。今回のアラムートの城塞攻めの全貌を把握しているのは彼女だけだ。
「私、明日はあなたと一緒に行くわ」
「危険だ。この腕ではあなたを守りきれない」
「でも、誰かが行かなくてはならないでしょう？だったら、私は今日、追い着いたばかりだから、皆さんほど疲れていないわ。私が行くのがいちばんいいと思うの」
「だからって、あなただけ行くわけではないのだろう？」
「危険なことは誰が行っても同じではないの？」
グランディーナがしばし黙り込んだので、ただ波の音だけが聞こえていた。ただしそれはアヴァロン島で聞くのとは違って、荒々しく、唸るようでもある。それを聞く彼女の横顔もいつもより厳しい。
「あなたはもう休め。私につき合うことはない」
「私、そんなに弱くないわ」
「教会で夜勤の務めをするのとはわけが違う。あなたは疲れていないと思っているかもしれないが、気づいていないだけで疲労はかなり溜まっているはずだ」
「でも」
けれどその時、激しい波の音を軽々と飛び越えて、微かな歌声が聞こえてきた。
「ユーリアさん?!」
「しっ！」
そうだ。その声はユーリア＝ウォルフのものに間違いない。解放軍本隊に先行してギルバルドやアラディとともにアラムート海峡に行ったユーリアの歌声だ。

しかし彼女が近づいてくる様子もないし、近くにいるのでもないようだ。うっかりすると聞き逃してしまいそうな声でもあるし、騒々しい波の音に負けない強さもある。

不意に曲が変わったが、アイーシャにははっきりわからなかった。隣のグランディーナは身じろぎもせずに耳を傾けているようだが、折からの風が半月を隠してしまったのでその表情も見えない。

それからどれぐらいのあいだ聞いていたのか、歌声は急に止んで、辺りはまた波の音だけに包まれた。

と同時にグランディーナが立ち上る。彼女は走って野営地に戻り、トリスタン皇子やアッシュたちリーダーをたたき起こして、夜明けとともにテグシガルパを発つことを伝えてまわった。

トリスタン皇子以外の誰もが疲労の色も濃かったが、反対意見はもはや上がらない。もちろん上がったところでグランディーナが耳を貸そうとは、アイーシャにも思えなかった。

彼女が最後に行ったのはロシュフォル教会だ。そうでなくても狭い建物は、解放軍と帝国軍双方から運び込まれた負傷者のために足の踏み場もないほど混雑していた。そして解放軍も帝国軍も区別されることなく手当を受けていたが、そのほとんどは重傷者だ。

「私は休むわけにはまいりませんし、この方たちをおいてアラムートの城塞に行くわけにもまいりません。アラムートの城塞にはモームさんとアイーシャさんに行ってもらいます」

グランディーナの顔を見るなり、マチルダはいつになくきつい調子で告げる。彼女が今晩は一歩も引かない構えでいることは容易に見て取れるほどだ。

「あと一人、アラムートの城塞にまわしてくれ」

もちろんグランディーナがそれぐらいで引っ込むはずもない。その口調はマチルダのけんか腰と言ってもいい口調もかわして、どこまでも冷静だ。

マチルダとて、グランディーナが己の言い分を素直に受け入れるとは思ってもいないだろう。

「それでしたらロゼさんではいかがですか？」

「ロゼは僧侶だ。司祭の方がいい」

そこで初めて彼女は教会内を振り返った。

ロゼ＝チャップマンは、デネブと一緒に来た後発隊なので、アイーシャ同様、治療に参加したのはテグシガルパからである。だからマチルダも名を挙げたわけなのだが、グランディーナが拒否する理由も治療部隊の責任者としてわからないでもなかったのだ。

「ノルンに頼もう。彼女もトリスタンのように一度も戦闘に参加していないからな」
「ですが、ノルンさんが承知されるでしょうか？今回はラウニィーさんもいませんし」
「ギルバルドもユーリアもいないのではラウニィーしかあの二頭は扱えない。しょうがない」
「そうですね。ノルンさんがそちらに加わっていただければ安心ですわ。そうしていただけますか」
アイーシャは知らなかったが、「あの二頭」とは、ラウニィーが上都ザナドゥから連れてきたケルベロスのことだった。コイオス、タラオスと名づけられ、マラノで再会したという彼女の愛玩犬なのだが、実態はそんなにかわいらしいものではない。なにしろケルベロスは双頭の魔獣ヘルハウンドの突然変異が改良された種である。頭の数はさらに多く三つ、性質は獰猛そのものでヘルハウンドさえケルベロスの前ではまるでおとなしい犬に見えてしまう。
なんでも彼女が仔犬のころから育てたそうで、そうでなくても餌代がばかにならない魔獣を二頭も飼いたがったラウニィーもラウニィーなら、そのわがままを認めたヒカシュー大将軍も一人娘には大甘であった。
さすがのグランディーナもそんな事情でケルベロスが解放軍に加わったことには驚かされた。さらにギルバルドが説明するには、この二頭、ラウニィーのほかはユーリアにしかなついていない。ギルバルドも命令を聞かせられないでもないのだが、扱うにはまだまだ緊張させられるそうである。
そんな話は、アイーシャがアラムートの城塞陥落後に聞いたことだ。その時は二人の会話は聞き流してしまっていた。それよりも彼女には、そうでなくても疲労の色が濃いマチルダたちに、いくらグランディーナの命令とはいえ、これ以上負担をかけるところは見たくなかった。
「もう手当はあらかた済んだのだろう？」
「ええ。ですが、まだ目を離したくない方も何人かいらっしゃるので、交替で起きていようと思います。もちろんモームさんには、もう休んでもらいましたわ。アイーシャさん、あなたも休んでくださいね」
「はい、ありがとうございます」
グランディーナが踵を返したのでアイーシャも後を追う。
マチルダもそれを見送ってなどはおらず、急ぎ足で教会の奥の方に戻っていったが、行く途中途中で皆に声をかけられていた。

翌金竜の月七日未明、解放軍を乗せて船がテグシガルパの港を発った。乗船者は四体のパンプキンヘッドを加えて三一名、その半数以上が手負いという、解放軍始まって以来の危機的な状況である。

「デネブ、帝国軍が出てきたら、とりあえず南瓜をかましてくれ」

「あら、いいわよ。だけど、さすがにアラムートの城塞ともなると、カボちゃんたちにも壊せないわぁ」

「外壁を破壊してくれればいい。ミナチトランのように、中に入るのに一日費やすわけにはいかない」

「だけど、カボちゃんたちの出番がそれで終わりってわけじゃないんでしょ？」

「それ以上は期待していない。せいぜい南瓜で敵を攪乱(かくらん)してくれればいい」

「あなたってほんとにそういうところがかわいくないわよね。いいわ、見てなさい。いまにあなただってあっと驚くような改造をしちゃうから」

「どうぞ。パンプキンヘッドはあなたのものだろう。何をしようと私が口を挟む筋合いじゃない」

「んまーっ。あなた、カボちゃんたちのことを何だと思ってるのよ?!」

憤慨するデネブをよそに、四体のパンプキンヘッドたちはかしまし三人娘と遊んでいる。その場にはアイーシャやモームにポリーシャまで加わって、四体は四体がそれぞれの反応をしてみせていた。

女性陣の中でなぜかラウニィーとノルンだけは、パンプキンヘッドを好まない。その人間に似て人間ではない動きが彼女たちには不快に思えるらしい。

いまもノルンは、早朝たたき起こされ、問答無用でアラムートの城塞攻めに加えられたためにさらに不機嫌そうな顔で船室に下りていた。

「改造と言えば、ディアスポラでしていた買い物はどうした？」

「あれから移動したり、カボちゃんたちと別れ別れになっちゃったりしてたでしょ？　必要な器具がないんですもの、何にも使ってないわ。だいいち野ざらしで実験て、落ち着かないのよねぇ」

「あなたはそんなことには不自由しなさそうだと思っていた」

「あたしって繊細(でりけーと)なの。美しいって罪なのよね」

グランディーナが答えられずにいたので、耳をめいっぱい大きくして聞いていた男性陣は思わずそれぞれに振り返る。彼女は左手を魔女の肩に乗せて顔を伏

せていた。
デネブは片目をつぶってみせた。もちろん、彼女は無傷のままで、ピンク色の服も帽子も乱れたところがない。グランディーナが今日も利き腕を身体に縛りつけて包帯だらけになっているのとは対照的だ。
「なに、笑ってるのよ？」
「あなたがおかしなことを言うからだ」
「あら、あたしは事実を言ったまでよ」
「事実であることは認めるが、話がつながってないじゃないか」
「そうだったかしら？　でも嬉しい」
「何が？」
「あたしが美しいって認めてくれてるのね」
「いまさら否定する者はいないだろう？」
「あなたってそういうところが可愛くないのよ！」
デネブが殴りかかるのを、グランディーナは顔を上げて押しとどめる。二人の会話を盗み聞きしていた者たちが少し慌てるのには目もくれず、彼女はそのまま立ち上がると、船首に向かった。
魔女がその後をついていくと何もしていないのにパンプキンヘッドたちもてんでばらばらにやってきた。女性陣も何事かと目を見張っていたが、アイーシャなどはすっ飛んでくる。
空はとうに明るく、海峡はいつもと変わらず荒れ気味だが、この期に及んで船酔いする者などいなかったのは幸いだった。
「もうじきだ。ノルンを呼んできてくれ」
「はい」
「わたしも一緒に行こう」
「すみません、トリスタン皇子」
やがて三人が船室から戻ってくると、グランディーナは話し始めた。
「聞いていた者もいたろうが、接岸したらパンプキンヘッドたちにあれをやってもらう。そこから侵入するが、遅れて魔獣部隊が着く。彼らが着くまで持ち堪えてくれ。連中が要塞を空けてくれればいいが、戦力を分断するぐらいに留まるかもしれない。だが、ギルバルドたちがアラムートの城塞を落とせばこちらのものだ」
「もしも我らがギルバルドらが来るまで持ち堪えられぬほどの戦力であったらいかがする？」
「もう敵もそれほど残っていない。強敵はジェミニ兄弟だけだ。それもできるだけ私が引き受ける。後衛部隊は後に続け。治療部隊は最後尾だ」

「わたしはトリスタン皇子と一緒にまいります」
すかさずそう言ったのはケインだ。
「好きにしろ」
「帝国が船を出したらどうする？」
「敵がアラムートから離れるのは却ってこちらに都合がいいが、それほど戦力が残っていないいま、守備隊が要塞を離れることはないだろう。もしも攻撃してくるのなら容赦することはない」
「その時はカボちゃんたちは船を攻撃させればいいのね？」
「できればな」
「またそんなこと言うんだから！」
デネブは頬をふくらませたが、パンプキンヘッドの攻撃が動く標的に当たりづらいことは周知の事実だ。
「これが最後の攻撃だ。何があろうともアラムートの城塞は落とす」
そう言うと、彼女は振り返り、近づいてゆく荒鷲の要塞を眺めた。
「まさか、その腕でジェミニ兄弟を倒せると？」
「案ずるな。あなたたちが倒されるようなことにはならない」
「君を信じよう、グランディーナ」
トリスタンの言葉に、彼女は皆に向き直り、頷いた。
彼にも根拠があるわけではない。しかし彼女がそう言い切る理由を打ち明けることはないだろう。ならば、自分がそう言うしかない。この場のほとんどの者は解放軍の古参かリーダーで、トリスタンのことも知っている。彼の言ったことを否定しはすまい、という判断からだった。
「ウォーレン、呪文の射程範囲内か？」
「まだです」
「外壁を狙っていいんだったら、カボちゃんたちはもうじき届くわよ」
「南瓜を外に落とすな。せめて要塞の中に落とせ」
「了解」
デネブが手招きすると、パンプキンヘッドたちは相変わらずおぼつかない足取りで近づいた。
魔術師や槍騎士も準備をする。
外壁の上にも帝国軍が顔を出し始めたが、解放軍の到着が予想以上に早かったのか、少し慌てている。
「いまよ〜！ ドラッグイーター！」
かけ声とともにパンプキンヘッドたちは己の頭を蹴り上げた。そのうちの一つはてんであらぬ方に飛んでいったが、残る二つの南瓜はグランディーナの要求ど

おり外壁を打ち壊し、最後の一つがアラムートの城塞の中に落っこちた。不思議なのは落としたはずの南瓜が元のように収まっていることである。

荒鷲の要塞の中から悲鳴が聞こえた。内部が混乱し、突然、文字どおり降ってわいた事態への対処に追われているのもわかる。

その隙を逃さずウォーレンたちが呪文を撃ち込んだので悲鳴はさらに大きくなった。

しかし、遅れて帝国軍からも呪文が飛んでくる。

船は前進を続け、南瓜の空けた穴に接近した。

「行くぞ！」

「反乱軍を中に入れるな！」

板を渡して城塞に乗り込もうとする解放軍と、それを押しとどめようとする帝国軍がぶつかり合った。

だが、もはや帝国軍に解放軍を圧倒する数はいない。グランディーナの指示の的確さもあり、解放軍は徐々にアラムートの城塞内に侵入していった。

入り口から外壁に入り、通路を抜けると草地に出る。アラムートの城塞は二重構造になっており、そこに要塞が建っていた。敵の本拠地まで攻め込んだというのに、その大きさはなおも彼らを威圧する。

しかし解放軍の勢いも止まらない。草地から城塞への入り口を巡って、なおも抵抗を見せる帝国軍に戦闘を挑むと、これを城塞の中庭まで押し返した。

「デネブ！　もう一回いけるか?!」

「あなたもほんとに人使いが荒いわねぇ。これで最後よ！

ドラッグイーター！」

四つの巨大な南瓜が城塞の中庭を舞う。

さすがに今日、二度目、今回の戦いの中では三度目ともなるとアッシュたちも見慣れてきたが、トリスタンとノルンはただ目を丸くするばかりだ。

「行くぞ、兄者！」

「おう、弟よ！」

「風よ、唸れ！」

ところが、中庭の向こうからそんなかけ声が聞こえたかと思う間もなく、疾風が巨大南瓜を吹き飛ばし、その場にいた解放軍、帝国軍の区別なしになぎ倒してしまったのだ。

そこに現れたのは巨躯の戦士二人であった。ホークマンよりもさらに背が高く、盛り上がった筋肉といい大きな手足といい、半巨人という噂も嘘ではなさそうな巨漢である。

「あなたたちがジェミニ兄弟だな」
真っ先にグランディーナが立ち上がるのを二人は目を見張って眺め、互いに頷き合った。
「赤銅色の髪の女剣士、反乱軍の将に間違いない」
「うむ、兄者。ついに奴らがここまで来てしまったぞ。かくなる上は我ら二人の力を合わせて、反乱軍を迎え討とうではないか」
「待て、弟よ」
「何だ、兄者？」
「反乱軍といえども武人の端くれ、我らも同じ武人として礼を欠いてはなるまいぞ」
「さすがは兄者だ。敵とはいえ、武人の礼を欠いたとあっては我ら兄弟の名がすたろうというもの」
二人の呑気な会話のあいだに立ち上がれる者は立った。ジェミニ兄弟の放った攻撃は、四つの南瓜を消したばかりでなく、主に味方を倒してしまい、解放軍にはむしろそれが楯となったのである。
「反乱軍の勇者たちよ、よくぞここまで来たな」
「殺生は辛いが、帝国に刃向かう奴らを許すわけにはいかん」
「うむ。エンドラ陛下とヒカシュー大将軍よりお預かりしアラムートの城塞を、これ以上、おぬしたち反乱軍の好きにさせるわけにはいかぬ」
「女といえど容赦はせぬぞ、覚悟しろ！」
「行くぞ、ポルックス！」
「おうよ、兄者！　我らの攻撃、受けてみよ！」
「ジェミニアタック!!」
ポルックスが前に出て身を縮めた。と思う間もなく、カストルがその背を蹴り上げたので、大きな身体がグランディーナ目がけて飛んできた。
しかし彼女はポルックスを避け、その巨体はそのまま内壁をぶち壊し、草地さえのぞいたほどだ。
「なんと、兄者！」
「ドラゴンをも一撃で屠る我らの必殺技を、こうも軽々と避けるとは！」
トリスタン以下、解放軍の面々には、石壁を壊しても傷ひとつない様子で立ち上がったポルックスの方が不可解である。
だが、グランディーナ一人がジェミニ兄弟を見ていなかった。彼女の視線はカストルを飛び越えて、アラムートの城塞のてっぺんに向けられている。
そのことに気づいて、最初、トリスタンが上を見たのでアッシュとケインもつられ、解放軍の者もジェミニ兄弟もつい同じ方に目をやった。

そこには青い無地の旗が翻っており、見慣れた人影、ホークマンが手を振っているではないか。
「アラムートの城塞は我ら解放軍のものだ！　ジェミニ兄弟、まだ無駄な抵抗をするつもりか?!」
「卑怯なり！　反乱軍め、我らを騙したのか?!」
「城を明けたのはあなたたちの方だ。抵抗するのならばこちらも容赦はしない！　彼らを倒せ！」
「おおうっ！」
アッシュとケビンが呼応し、素早くカストルに斬りかかった。遅れてチェスター、アレックらが続く。
孤立したポルックスにもウォーレンたちが魔法を浴びせ、もはや囮という役目も必要なくなったのでケインがトリスタンを前線から戻す。
だが、ジェミニ兄弟が無防備に立っていたのもわずかのあいだでしかなかった。集中攻撃を受けて我に返ると、カストルの蹴りにアッシュとオルティアが吹っ飛ばされ、ポルックスの拳にはオイアクスとキリクスが倒された。
「我ら兄弟をなめるな！」
続いて、カストルの繰り出した拳にアレックとフォボスが倒され、ポルックスの蹴りはケイエスとプレグラーを壁にぶち当てた。
そうしてジェミニ兄弟は再び並び立ち、対峙した解放軍を睨みつける。
「彼らを倒したぐらいでいい気になるな。そんな攻撃が私に効くと思っているのか？」
グランディーナが皆の前に進み出る。
「ジェミニアタックなど聞いて呆れる。ご大層な名前をつけても当たらねば話になるまい？」
ジェミニ兄弟の白い顔が、別人のように朱に染まる。二人とも鎧を身につけておらず、有翼人のように軽装だ。隆々とした筋骨が挑発に応じるように波打つ。
「その言葉、我らの攻撃を喰らっても言えるか」
「やれるものならやってみろ！」
「ゆくぞ、兄者！」
「おう、ポルックス！」
ジェミニ兄弟の繰り出した攻撃はジェミニアタックではなかった。疾風の正体は目にも止まらぬ速さで撃ち込まれた拳圧だったのだ。
だが、すでに剣を抜いていたグランディーナは、片手だけで自身の必殺技を放つと、いくらかでもそれを押し返しさえした。けれどもそれは諸刃の剣だ。その鋭い刃（やいば）は彼女自身ばかりでなく、側にいた者をも傷つけてしまう。

しかし、それでもジェミニ兄弟を驚かせるには十分だったし、四つの巨大南瓜を吹っ飛ばした疾風から皆をいくらかでも守った。

「信じられぬぞ、兄者」

「我ら兄弟をここまで虚仮(こけ)にした奴はいないぞ、弟よ。だがジェミニ兄弟の名にかけて、反乱軍はここで倒しておかねばなるまい」

グランディーナはポルックスの空けた穴に近づいた。

「ご託はいいからかかってくるがいい。アラムートの城塞を失って、あなたたちにこれ以上戦う意味があるとも思えないがな」

「我ら兄弟に降伏はあり得ぬ！　我らかおぬしたちか、どちらかが倒れるまで戦うが定め」

「行くぞ、兄者！」

「おう！」

ポルックスが再び身を縮める。

「いまだ！」

「なにっ?!」

黒い影が上空から兄弟に覆い被さったのと、城塞から現れた魔獣が襲いかかったのはほぼ同時だった。

ワイバーン二頭がポルックスをひっつかみ、二頭のケルベロスがカストルに襲いかかる。ワイバーンを操るのはニコラスだが、ケルベロスの後からラウニィーが姿を現した。

三つ首の獰猛な魔獣に怯(ひる)むようなカストルではなかったが、二頭も負けてはいない。彼に攻撃させじと間断なく攻撃し、ラウニィーが援護する。

ワイバーンとポルックスの戦いも激しさを増していた。早々にワイバーンの爪から逃れたポルックスだったが、二頭に阻まれてどうしてもカストルに近づけない。かといって孤軍奮闘するには敵の手が多すぎる。

二人は徐々に追い詰められていった。

だが半巨人の噂も伊達ではなかった。ふつうの人間ならばとっくに倒れていそうな傷を負いながら、とても倒れそうにない。逆に小柄なワイバーンのクロヌス、ケルベロスのコイオスを続けざまに倒して、二人は吠え声を上げた。

しかし魔獣もそれで終わりではない。ホークマンのチェンバレンに操られた二頭のコカトリス、ロギンスに操られた二頭のグリフォンが波状攻撃を仕掛け、残ったワイバーンとケルベロスも再攻撃に転じる。

とうとうポルックスが膝をついた。

「もはやこれまでか、兄者！」

「なんの！　我らとてジェミニ兄弟、ただでやられ

はせぬ！」
襲いかかるコカトリスとグリフォンをなぎ倒して、カストルが飛び出した。
「かくなる上は我らとともに死んでもらうぞ！」
彼が目指したのはグランディーナだった。
だが、彼女にはそれがよほど意外だったらしく、抵抗はしたものの、片手用の剣などカストルの手で軽くへし折られてしまった。
「離せ！」
「我ら、アラムートの城塞を失っても反乱軍の将と相打ちとなれば名目も立とうというもの！」
「グランディーナ!!」
パンプキンヘッドが外壁に空けた穴から、カストルは海に飛び込んだ。その金髪と赤銅色の髪が同時に波間に消える。
泡ぶくが立ち、消えていった。
誰もが土壇場でのまさかの相打ちを覚悟したその時、二人の消えた海面が再び泡立ったかと思うと、多数の吸盤をつけた灰茶色の足が突き出して、ギルバルドの操る海の魔獣クラーケン二頭が海面に躍り出てきた。
一頭のクラーケンにはグランディーナがしがみついていたが、もう一頭がカストルを八本の足で押さえ込んでいる。
その場にいた誰もが歓声を上げずにいられなかった。
グランディーナには皆に視線を向けるほどの余裕があったが、死を覚悟して飛び込んだカストルはさすがにクラーケンから逃れる力もないようだ。
しかし、ギルバルドが鞭を鳴らすと、二頭は揃って海に沈み始めた。
二人が海面に呑まれてしまう前に、ライアンとカリナに操られた二頭のグリフォンが飛来してきて、その爪に一人ずつ引っかけて城塞に戻ってくる。
カストルの悲鳴は聞こえなかった。それは皆の見守る前で海の藻屑と消えたのであった。
「おぬし、わざと兄者に捕らえさせたな？」
ポルックスはもはや虫の息で、全身に受けた凄まじい傷が、この男の強靱さを逆に物語っている。
対するグランディーナも濡れ鼠の上、包帯が外れて右腕は垂れ下がり、いたるところ傷だらけだった。
「あなたたちを海にたたき込むつもりだったのは確かだ。まともに戦っても勝てないだろうからな」
「我らの負けだ。この世の名残にその手、取らせてはもらえぬか」
差し出された震える手を彼女は無言で握り返した。

丸太のように太い腕の筋肉が激しく波打ったが、その動きは不意に止み、ポルックスの眼からも急速に光が失われていった。

グランディーナは己の手を食い込むように握り締めた手をほどき、立ち上がった。ポルックスが握っていたのはわずかのあいだだったのに、太い指の痕が手の甲から平にかけてはっきり残っている。

しかし彼女は何事もなかったかのように短刀を振りかざした。

「アラムートの城塞は我らのものだ！　残党を駆り出せ!!」

「おおう！」

ケビン、チェスター、スティングが呼応して自分の剣を振りかざす。

遅れて、動ける者は皆、己の武器をかざして勝ちどきを上げると、数人ずつ組んで、アラムートの城塞中に散っていった。アイーシャたちも負傷者の手当に働き出す。

こうして、解放軍は数多(あまた)の犠牲を払って、アラムートの城塞を落とした。それはすなわち、ゼテギネアの東大陸がゼテギネア帝国の支配下から外れたことをも意味し、反帝国勢力の筆頭としての解放軍の存在が、誰の目にも明らかになったのである。

彼女らの前にゼテギネアで唯一のダルムード砂漠が横たわる。砂塵の彼方に待ち受けるのは、ゼテギネア帝国の中枢、それはもはや手の届かぬものではなくなっていた。